

# 『愚者』と巡る、大いなる旅路

K氏

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

人生とは旅だ。長いようで短い、限りある命の旅。その果てに、人は己のこたえを見出す。

そして、これから彼が向かうのは、七つの特異点を巡る、偉大なる旅路。

かつてその儂い命を燃やし尽くし、『命のこたえ』に辿り着いた彼は、人類史に決して刻まれる事のない異端にして無名の英霊として、人類最後のマスターと共にその旅路を征く。

限りある人の命を繋ぐ為に。そして、マスターの少年が導き出す『こたえ』を見届ける為に。

※本作はFate／Grand orderとペルソナ3のクロスオーバーです。特にペルソナ3はED後の為、(極力抑え目にはしますが)ネタバレ多めになります。ご了承ください。

目次

邂逅の時	1
特異点F [1]	7
特異点F [2]	17
特異点F [3]	26

## 邂逅の時

——そこは、まさしく地獄だった。

元々は発展した近代都市だったであろうその街並みは、今や見る影もなく燃え盛っている。燃えているだけではない。人々の暮らしの為に築き上げられた建造物のことごとくが、無残な姿に成り果てている。

だが不思議な事に、そこに人の声はおろか、生物の気配すらない。聞こえるのは、燃える炎の音、火に焼けて劣化し崩れ落ちる瓦礫の音、そして時折聞こえる、刃の飛ぶ音や骨が動いているかのような不可解な音。

何が起きても不思議ではないこの地獄変の中、それを調査しに来た三人の男女が、その街の中の一画である事を為さんとしていた。

人理継続保障機関『フィニス・カルデア』。それが彼らの属する組織の名だ。人類史にできた特異点を調査、これを修正する事を目的とする彼らは、記念すべき初のレイシフトにおいて、何者かのテロ行為により、レイシフトの素養を持つメンバーの大半を失った。

だが、たった一人、運命のいたずらでその被害から逃れた少年がいた。

この組織のほとんどを占める魔術師と呼ばれる家柄の者でもなければ、特別な技術を持っているわけでもない、本当の意味での一般人。それが今、召喚陣を前に呪文を詠唱している少年、つまりあなたであった。

あなたの背後で、やや際どい黒の鎧に身を包んだ少女——マシユ・キリエライトと、険しい表情の銀髪の女性、カルデアの所長であるオルガマリー・アニメスフィアが、固唾を飲んで見守っている。

今行っているのは、カルデアが保有する英霊召喚システム『フェイト』によるサーヴァントの召喚。現在彼らの側で戦力として数えられるのは、実質マシユ・キリエライト唯一人。そんな彼女ですら、『デミ・サーヴァント——英霊と人間の融合体——と呼ばれる、正規の方法で召喚されるようなサーヴァントではない存在。ほんの偶然でサー

ヴァントになってしまった彼女には、サーヴァント達が行うような本格的な戦闘経験はない。

加えて、彼女のクラスであるシールドは、守りに特化した特殊なクラス。そんな彼女一人で、この先戦い抜くには少々どころかかなり心細い。

だから、今必要とされるのは、盾の担い手である彼女と対を為す攻め手の持ち主。

だが、このフェイトシステムを用いた英霊召喚は、本来のそれ以上に精度が低い。元となった聖杯戦争での召喚は、英霊に縁のある遺物を用意する事で、ある程度は狙いを絞る事が出来る。だが、カルデアのそれで使われるのは、聖晶石と呼ばれる特殊な鉱物。未来を確定させる概念が結晶化したものであるこの鉱物を使うことで、英霊がいるという未来が来る確率を高め、呼び込むのだ。

しかし、同時に高い頻度でサーヴァントに装備させる礼装が出てくる事もあり、特に強力なサーヴァントを呼ぶ事に関してはほとんど博打に近く、それ故に責任重大であった。

——あなたは、願う。自分と一緒に戦ってくれる英雄を。

——右も左も分からない、こんな自分を導いてくれるような、頼もしい英雄を。

——何よりも、自分を先輩と慕ってくれる後輩マシユを助けてくれるような、そんな英雄を。

そして、あなたは詠唱を完了させた。

それと同時に、召喚サークルの設置の為に置かれていたマシユの大きな盾から、光の玉が浮かび上がる。そして、それらの玉が盾の上で円を描くように回り始めると、一瞬にして光の輪となる。

僅か数秒の後、輪が外側へと広がったかと思うと、その輪が三つに分かれる。これから召喚されるものが、サーヴァントである証だ。

そして、光が一気に中央へ収束し、光の柱が立ち昇る。

「——!?!? この霊基パターンは?!!」

マシユが、何か切迫した様子で言っているが、あなたはそれどころ

ではない。人生で初めて見る光景に、その神秘さに、心奪われていた。  
『……汝——』

不意に、誰かの声が聞こえた。だが、耳に聞こえたものではない。  
どういうわけか、あなたの心に直接届くかのような、そんな声。

——……愚者？

そんなワードが、突然あなたの脳裏に閃く。

その声は、どうやら後ろの二人には聞こえなかったようだ。

しばらくして、眩い光が収まると——

「……あれ。もしかしなくても、呼ばれた？」

——長い前髪で右目を隠した、現代日本の高校生の制服らしきものに身を包んだ少年が立っていた。

「……は？」

思わずそんな声が漏れてしまったが、あなたは一切悪くない、筈だ。  
現に少し振り返ってみれば、マシユは呆気にとられ、所長もあなたと同じように「は？ え？」と間抜けな声を漏らしている。

面食らうのも無理はないだろう。あなたが想像する英雄とは、基本的に筋骨隆々の逞しい男だったり、昔の鎧を着ていたり、見た目からにして凄そうな武器を持っていたりする者達だ。

それが、実際に召喚されたのは、どこからどう見ても現代人。しかもあなたと同年代ぐらいの。これが困惑せずにいられようか。

「……はっ、ダメダメ。何を驚いてるのよ、オルガマリー・アナムスファイア！ ここで私がちやんとしないと……」

一番最初に我に返ったのは所長だった。自らの頬を挟むようにパンパンと叩き、キツとした目つきをしながら、謎の少年に問いかける。

「……オホン。よくやって来ました。アナタが何処いずこかの英霊かは知りませんが——」

「えっと、君はマスター……ではないね。どう見ても」

完全に出鼻を挫かれた。あえて強気に出て威厳を出そうとしたつもりなのであろうポンコツ所長は、少年に言葉を遮られるどころか、遠回しに自分が気にしている事を突かれ、思わずすっこけてしまいそうになる。

「……え、ええ。そうです。そうですとも。私はマスターではありません」

が、ここで怒っても仕方がないと分かっているのか、なんとか理知的に答えたのを見、あなたは「自分が召喚した」と手を挙げた。

「……そう。ここにいる彼が、アナタの召喚者、マスターよ」

「ついでに言えば、レイシフトの素質ぐらいしかないタダの一般人よ」と付け加えながらそう告げられた少年は、その言葉に特に関心を持つ素振りも見せず、ただ、あなたの事を観察しているようだった。

……よくよく見てみれば、かなり中性的な顔をしている。所謂、イケメンという部類の人間だ。自分の通っていた高校にいたら、きっと女子生徒の人気を一身に受けていたことだろう。いや、女子だけではない。なんと言うべきだろうか、纏う雰囲気が違うのだ。魅力に溢れていると言っても言うべきか。

こういうのをカリスマがあるというのだろうか、などとそんな関係ない事を考えながら、あなたは黙って少年に観察されていると、少年は何か納得したのか、うんと頷く。

「少しいいかな」

——えっと、何ですか？

「そんなに畏まらなくてもいい。ただ、ちよつとこのカードを引いてみて欲しいんだ」

そう言われて差し出された彼の手元には、いつの間にかカードの束が握られているではないか。

驚くあなたを他所に、少年は慣れた手つきでカードを扇のように広げると、あなたへと差し出した。

なんだかよく分からないが、とりあえず指示された通り、あなたはカードを直感的に選び、それを抜き取った。

それから、「表に返してみて」と促されるままに、あなたは手にしたカードを裏返す。

描かれているのは、一匹の犬を連れた旅人の絵。そして、カードの下には『0』が刻まれている。

「……なるほど。そういう繋がりか」

——……？ それって、どういう……。

「ああ、いや。君が今気にする必要はない。特に、こんな状況じゃあ、ね」

「……あの、ところで貴方は一体？」

そこで、ようやく状況が呑み込めてきたマシユが、努めて冷静に少年に問いかける。

「ああ。そういえば、まだ名乗ってなかったっけ。……といっても、名乗る名前がなあ」

すると、少年は困ったように頭を掻きだす。

「何よ、まさか真名どころか、クラスすらも名乗れないとか言うんじゃないでしょうね？」

「まあ、半分は正解かな」

——半分？

「そう。俺は少し、霊基が特殊でね。明かすと色々面倒つてのもあるけど……真名に関しては、間違いなく仕様で明かせなくなってる」

明かしたいのは山々だけどね、と付け加え、少年は苦笑を漏らす。

「しかし、そうだなあ……一応霊基の偽装は出来なくもないし、うん。とりあえず便宜上のクラスと真名でも名乗っておこうか」

サラツと口に出されたそれは、魔術師的にはかなり思うところがあつたのか、マシユは再びあんぐりと口を開け、所長はまたぎやあぎやあと捲し立てる。その内容は、正直現在のあなたにはまるで理解できない内容ばかりだ。

「クラスは……どうしようか。フル、ワイルド、ジョーカー……最後のはなんか違うな。具体的に言うの後輩辺りが使ってそうというか」  
そんな騒がしい状況にあっても、少年はまるで動じる事無く、あれやこれやと考えを巡らせているようだった。



……なんだか、かなり肝が据わってるというか、漢という言葉が似合うというか。

「……よし、決めた」

一体どういう経験をしたらこんな状況でも動じない勇気を得られるのかという疑問と、少年に対する複雑な憧憬の念が頭の中を堂々巡りしていると、少年も考えが纏まったらしい。

「俺は、アルターエゴのサーヴァント。真名は……仮に、オルフェウスとしておこうか。コンゴトモヨロシク……」

少年は自らをそう名乗った。これが、旅を始めたばかりの愚者と、

■ ■に至った者との初めての出会いだった。

## 特異点F【1】

『……で、その結果その彼が召喚された、と?』

カルデアの医療部門トップ、ロマニ・アーキマン、通称D r. ロマンは頭を抱えていた。

原因は当然、少し前にあなたが召喚したサーヴァント、自称アルターエゴのオルフェウス（仮名）である。

『あー、御身が如何なる由来の英霊なのか——』

「畏まる必要はないよ。実際のところ、僕は生前マスターと同じぐらいの年齢だったし」

当の本人はどこ吹く風。混沌としたこの特異点にあっても、穏やかな姿勢をまるで崩さない。

……一部に関しては彼が混沌の中心地ではあるのだが。

『え、えーと、それじゃあ遠慮なく。君は、一体何者なんだ? その、服装から察そうにも……』

「うん。普通はわからないし、わかるわけがないよね。だって俺、紛れもなく日本生まれの高校生だったわけだし」

「こ、高校生、ですか」

思わずあなたは、マシユと顔を見合わせる。

英雄についての知識が薄いあなたとしては、「そういう事もあるのか」で済むかもしれないが、流石に本人の口から「自分は元現代人だ」と言われてしまったては、首を傾げるしかない。

「……あり得ないわよ普通! 魔術は存在しても、この文明が発達した現代に英雄が生まれるような環境、そうそうある筈がない! ましてや、今の日本で!」

「うん。君のその反応は最もだ。でも現に、俺という例外がいるんだよ」

見るからに常識とかに囚われるタイプであろう所長は相変わらず激しい剣幕を見せるが、オルフェウスはこれをあっさり受け止め、流す。

どういふ事なのかとあなたがマシユに聞いてみれば、簡単に言えば

英霊として座と呼ばれる場所に登録される為には、相応の信仰、つまりどれだけ知られているかが重要なのだという。

無論、現代を生きる人間であっても、その人物が為した事と内容によつては英霊にもなり得る。事実——昔の人間ではあるが——その知名度によつて有名な劇作家がサーヴァントとして召喚される事もあるそうだ。だから、現代人が英霊になる事も、一概にあり得ないとは言いい切れない。

「ま、俺自身の知名度なんて、港区周りぐらいしかないけどね。オマケに俺の持つ力に関しては、知ってる人間は更に限られてくるし」

しかし、本人がこう言うのだ。一体どのようなようにして英霊になったかは分からないが、あなたにも普通は日本の高校生が英雄と肩を並べる存在になるなどあり得ないのではないか、という事ぐらい分かる。

加えて、識者曰く「アルターエゴというクラス自体はデータがあるが、実際に現出したという記録は確認されていないエクストラクラス」らしい。それ自体も便宜上のクラスなのだから、本当は一体何のクラスのサーヴァントなのやら。

「でもって、俺の場合は知名度を抜きにしても普通なら召喚されない。だからイレギュラー中のイレギュラーってわけ」

『……ちなみに、どこの高校に通ってたんだい？』

「港区にある私立月光館学園、高等部二年。それが俺の最終学歴になるのかな」

極め付けに、これだ。カルデアの面々が揃って閉口する。

曰く、英霊がサーヴァントとして召喚されると、その英霊の全盛期の姿になって召喚されるのだという。

そして、オルフェウスの口ぶりから察するに、恐らく彼は今と同じぐらいの時にこの世を去つたのだ。

その事実が、余計に一同を混乱させていた。

「……彼が一体何者なのかは、一旦保留にします。そうしないと先に進めない気がするわ」

「私もそう思います……」

あなたも所長と同意見だった。これはどう考えても混乱しか招か

ない。ましてやいつ敵が襲ってくるかも分からない状況では、後回しにした方が都合がいい。

そういうわけで、彼らは次の話に移る事にした。

「それで、彼のステータスはどのようなの？」

——……………？ 何故こつちを？

「決まってるでしょう!? サークヴァントのステータスを見れるのは、マスターのアナタなのよ!」

……………怒られてしまった。そこで、マシユからやり方を教わり、あなたはオルフェウスのステータスを閲覧する。

「どうやらさつき言っていた偽装とやらはちゃんと出来ているらしく、彼の名乗った通りクラス名は『アルターエゴ』、真名は『オルフェウス』という風になっていた。最も、あなたは素人だから騙されているという可能性も無くはないが。」

そして、分かる限りのステータスをそのまま所長に伝えると——

「……………はあ!? なによそのステータス!? 微妙! 微妙過ぎる! 下手したら今のマシユの方がマシじゃない!」

「どうなの!?! と詰め寄られるが、あなたにも何が何だか分からない。」

後でマシユに聞いたのだが——本当にマシユには頭が上がらない——、どうも彼のステータスはかなり低い方らしい。それこそ、七騎のサーヴァントクラスで最弱と称されるキャスターのサーヴァントと遜色ない程に。

だが、あなたにはそれよりも、気になる事があった。

「えっ、宝具がない、ですか?」

マシユの驚きの声に、あなたは頷く。宝具とは、サーヴァントの持ち切り札にして、その真名に辿り着く大きな手掛かりだ。アーサー王ならエクスカリバー、ジークフリートならバルムンク、といったように。

だが、今閲覧した中に、それらしい名のある武器がないのだ。あると言えば、ショートソードや槍、弓と、ごく普通の無銘の武器ばかり。

あったのは——

『ペルソナ……ユング心理学の心の仮面？　ってわけでもなさそうだけど……どういうスキルなんだ？』

——『心象具現・疑似降魔』。そう書かれたスキル。

奇妙な事だが、明確な記述があるのはこのスキルぐらいで、他は持っている武器のように特に目立った記述がないか、もしくは文字化けして閲覧できないものばかりだった。

内容は、『己の覚悟によって具現化する事の出来る、心の底に潜む「もう一人の自分」。心の仮面にして、同時に困難に立ち向かう為の人格の鎧。その姿は集合的無意識を介し、世界中の神や悪魔、英雄の形をとって現れる』というもの。

どうやらロマンの言うユング心理学のそれとは似て非なる、超能力や異能力に近いものらしい。だが、その実態は未だに掴めない。とどのつまり、実際に見なければなんとも言えなかった。

「……はあ。もしかして、外れサーヴァントを掴まされたのかしら」  
思わずネガティブな本音を漏らす所長。だが、オルフェウスは相変わらず、怒りや悲しみといった感情を見せない。

「あ、そうです！　確か種火というアイテムを使えば、霊基の強化が……」

種火とは、カルデア式で召喚されたサーヴァントの欠陥を補う為に消費されるもので、使用すればサーヴァントの性能を上げ、元々のステータスへ戻す事も、更に成長させる事も出来るのだという。

だが、彼は首を横に振った。

「生憎だけど、俺はそれで強化出来ない」

「ちよ、ちよっと！　それじゃあ余計ダメじゃない！」

「……勘違いしないでもらいたんだけど、何も今の状態から強化出来ないとは言っていないさ。ただ、俺の場合はマスターである彼の成長次第ってだけでね」

どういう事だ？　とあなたは問いかける。

「我は汝、汝は我。君の成長は、俺の成長でもあるのさ」

「それは、一体？」

「……彼は、0から旅を始めたばかりの旅人。さっきのカードが示し

た通りの『愚者』だ」

愚者。ストレートにとると、文字通りの愚か者という意味になるが……。

「確かに、愚者は無知を表すアルカナだけれど、その真意は別にある。愚者は全ての始まりのカード。つまり、何にでもなれる可能性を秘めているんだ。トランプの道化師ジョーカーが、ポーカーではワイルドカードなんでもアリを意味するように。チェスや将棋で歩兵が成り上がるように」

——つまり？

「俺の霊基のステータスは、君がこれからの旅で何を学び、そしてどう自らの糧にしていくかによって変化していく。俺と君は、心で——より正確に言うと、集合的無意識で——繋がっている。君がこれからの旅で成長すれば、俺は全盛期の頃の力を取り戻せるかもしれないし、もしかするともっと強くなるかもしれない、ってことさ」

全てを理解できたわけではないが、何となくイメージは掴めた。とはいえ、成長といっても具体的にどういう事なのかまでは分からない。

後であなたはその事を問いかけてみたが、「その時がくればわかるさ」とはぐらかされてしまった。

オルフェウスの能力確認を一旦終えたあなた達は、この冬木の街の異常を調査すべく再び移動を始めたのだが、その矢先に、異形の槍を携えた女性——シャドウサーヴァント・ランサーに襲われてしまう。

「やああー！」

向上した身体能力で盾を振るうマシユ。だが、戦いとは無縁の生活を送っていたあなたの目から見ても、その動きはぎこちない。

敵のランサーからはまるで見下すかのような視線が向けられているが、それでも諦めるわけにはいかない。だが、同時にあなたもマシユと同様に経験が足りない。

的確な指示を出せ、と言われても、何が正しく、何が間違っているのか、その判別がつかないのだ。

「……仕方ない、か」

そこに助け舟を出したのは、ランサーと一緒に襲撃してきたアサシンのシャドウサーヴァントを、ショートソード片手に相手をしていたオルフェウスだった。ちなみに今の彼はマシユよりも身体能力で劣ってはいるが、生前の戦いの経験を活かしようまく立ち回っていた。が、それでもかなり辛そうだ。

「……今回だけは、俺が代わりに戦闘の指揮を執る。君は、それを見て参考にするといい」

「は、はあ!? ……って、そういえばスキルにカリスマがあるって言うてたわね」

一瞬所長が動揺するが、彼がカリスマのスキルを持っているという事実を思い出して立ち直る。簡単に言えば、王や將軍のように誰かの上に立ったりするような者に与えられるスキルだ。

例に挙げたような立場の英霊が持つそれと比べると、そのランクは劣るらしいが、それでもこうした少人数での戦闘では十分な効果を発揮するらしい。

そんなスキルを持っているのは、彼曰く「鍛えた結果」、だそうだ。……これも成長というやつなのだろうか。

「マシユ。この戦闘では俺の指示に従ってほしい」

「りよ、了解です!」

「……それと、そこに隠れてる人も」

「え?」

唐突にオルフェウスが明後日の方向を見て何事かを言い出し、マシユが首を傾げるが、その答えはすぐに現れた。

「へっ。なんだ、気づいてやがったか」

「何となく、誰かが見てるなあって。戦えるかどうかについては勘だけだ」

「そりゃ、いい勘持つてるぜお前さん。俺あ今でこそキャスターのサーヴァントだが、戦うのは好きでね」

そう言いながらオルフェウスの視線の先の物陰から現れたのは、水色を基調とした独特な服装の男。フードを被り、大きな木製の杖を

握っている事から、本人の申告通り魔術師のサーヴァントなのだろう。

「貴様、我ラト相対スルツモリカ！」

「そりやそうだろ。元々敵同士なんだからよ。……で、兄ちゃん。顔合わせは初めてだが、指示とか出せんのか？」

「何が出来るかは、戦いながら知ればいいさ。後はどうにでもなる」

「そうかい！」と、フードの下から見える口元に獰猛な笑みを浮かべたキャスターは、杖をまるで槍のように構える。

「おっと、つい癖で構えちまった。……ま、いいか」

癖で？ キャスターが妙な事を口走ったのを、あなたは聞き逃さなかった。だが、今は関係ない事だ。あなたが今すべきなのは、戦いについて学ぶ事。

「さあ……やろうか」

オルフェウスを先頭に、その両脇を固めるようにマシユとキャスターが並び立つ。

キャスターが味方についた事で、2対2だったのが3対2。

練度の問題で一方的な戦いとはならないが、それでもこちら側がかなり優位にある。

「チィー！」

だが、相手も黙ってやられるつもりはないらしい。

ランサーが穂先の曲がった奇妙な槍……鎌？ を振りかざし、周囲に鎖を飛ばす。

その鎖が絡み合い、簡易的なリングが形成されたかと思うと、アサシンが目にも留まらぬ素早い動きで三人に迫る。

「マシユ、前に出て防御！」

「は、はい！」

それに合わせるように、オルフェウスが後ろに下がると、入れ替わるようにマシユが前に飛び出し、盾を構える。

瞬間、アサシンの得物である黒い短剣が突き立てられるが、マシユの盾にあっさりと弾かれる。

「今！」



「応！ アンサズ！」

そこに、オルフェウスのたつた一声で何をすべきかを理解したらしいキヤスターが、詠唱と共に杖を振るう。

振るわれた杖が、いつの間にか空中に描かれていた文字のようなもの——ルーン文字というらしい——をなぞると、それらが一瞬にして燃え上がり、三つの火球となってアサシンに襲い掛かる。

たまらずアサシンが避けようとするが——

「マシユ!!」

「了解です！」

攻撃を防いだ後、指示に従ってすぐにアサシンの背後に回り込んだマシユによって、退路を断たれてしまう。

「グウオオ!? ……クソツ、ランサー！」

「ワカツテイル！」

その身を包む黒いボロ切れのようなマントで炎を防ぐアサシンだが、しかしダメージは入っているようだ。火球の熱に苦悶の声を上げたアサシンだったが、劣化した存在とはいえ、彼もまたサーヴァント。すぐに立ち直ると、ランサーに援護を要請する——

「させないよ」

——が、それを阻むようにオルフェウスがショートソードを振るう。

その切先が、ランサーの腕を掠める。

「ツ、生意気ナ！」

掠めた箇所から血が漏れるが、ランサーは逆に手にした歪な槍を振るって反撃に出る。

対するオルフェウスはその場で屈み、紙一重でそれを回避。

その体勢から立ち上がりながら剣を振り、槍を跳ね上げようとする。

「舐メルナー！」

だが、ランサーの筋力の方が上なのか、オルフェウスは思うように槍を跳ね除けられない。それどころか、逆に上から押し込まれそうになっっていた。

思わず、あつ、と声を上げてしまいそうになるあなたと所長。

「コノママ、潰シテ……!」

「——そうはいかねえな」

だが、そこへキャスターのルーン魔術の炎が襲い掛かり、ランサーは避ける間も無く直撃。

意識外からの不意の一撃だった為か、ランサーはそのまま体勢を崩す。

「これで、倒れて!」

「又ウウ!?」

一方で、アサシンをなんとか抑えていたらしいマシユも、隙をついた連撃でアサシンを怯ませた。

「よし、今だ! 畳みかける!」

「よっしゃ、そうこなくっちゃな! 遅れんなよ、盾の嬢ちゃん!」

「はっ、はい!」

それを見計らったように、オルフェウスが号令をかけ、真っ先にキャスターが飛び出し、それに少し遅れるようにマシユも飛び出した。

それから程なくして、勢いの乗った彼らの総攻撃により、ランサー、アサシンともに霊核——サーヴァントの体を構成する文字通りの核——を破壊され、勝敗は決した。

——これが、サーヴァント同士の戦い。

あなたはそう眩きながら、ごくりと唾を飲み込む。

正直、圧倒されていた。映画で見るとような戦いよりも、もっと迫力があつて、もっと目まぐるしくて。

簡単には言い表せないそれに、あなたは自然と気圧される。

自分なんかが、本当にマスターとしてちゃんと指示を出せるのかと。

そんな不安そうなあなたを気遣つてか、先程マシユのお尻を触つて所長に怒られていたキャスターがにんまりと笑みを浮かべて、あなたの肩をポンポンと叩いた。

「なあに。これから学んでいきやいいんだよ。見たところズブの素人

みてえだからな」

(……兄貴)

直後に「ま、今のはほんの序の口程度だがな」と付け加えられたりしなければ、あなたはこの初対面の筈のサーヴァントをそう呼んでいたところだろう。何故そこで逆に追い詰めて来るのか、これがわからない。

## 特異点F【2】

ランサーとアサシンを撃破したあなた達は、協力してくれたキャスターに礼を言おうと、この冬木市に何があったのかを問いかけた。

キャスター曰く、最初は普通に聖杯戦争を行っていた筈なのに、気づけば彼らのマスター共々、この街から人が消えたのだという。あまりにも突然すぎて、何が起きたのか彼自身もまるで分からなかったそうだ。

この異常事態の中で真っ先に動いたのは、最優のサーヴァントと称されるセイバーだった。今回の聖杯戦争における賞品である小聖杯とはまた別に存在する、この土地の本当の『心臓』である聖杯、即ち大聖杯が何かで汚染されており、その影響で反転したセイバーは、次々と他のサーヴァントを撃破すると、彼らを聖杯の泥で汚染した。

汚染されたサーヴァント達は、先程あなた達が遭遇したシャドウサーヴァントとなり、唯一生き残ったキャスターを狙っていたのだという。

「……で、ここまで何とかマスター無しでやってきたんだがな。流石にこりや限界があると感じたもんでね。そこに、丁度お前さんらが現れたっつうワケだ」

「あのシャドウサーヴァント、知性は感じられなかったけど、聖杯戦争の原則として他のサーヴァントを倒さなければならぬ。つまりマシユが狙われたのもそのせいって事ね」

あれやこれやと情報交換を行う中、あなたは一人、先程の戦いの事を思い出していた。

——……自分に、出来るのだろうか。

正直、マシユ一人に指示を出すのもいっばいっばいだというのに、恐らくこれからもっと多くのサーヴァントと一緒に戦うことになるのだろう。

様々な戦いを潜り抜けてきた歴戦の英雄に、素人の自分が指示を出す。これがプレッシャーにならずになんとなろうか。

「……そう気負う事はない」

そんなあなたを、オルフェウスが穏やかに励ます。

「いいかい？ これは確かに、ゲームなんかとは違う、本物の戦いだ。……けど、ゲームとは決定的に違うところがある」

——それは？

「俺達っていう、意思を持つ仲間がいる事さ。君は、一人で戦うんじゃないんだ。不安になったら、俺達に助けを求めればいい。俺達は、可能な限りそれに応える。……そうだな、まず君がすべきなのは、信頼する事だ」

——信頼。

「そう。自分だけが気負わず、背中を任せられるようになる事。それがまず第一かな。……君のように自分一人で背負い込もうとする人間は、それだけ危なっかしいんだ。今すぐじゃなくてもいい。ゆっくり、慣れていけばいい」

最も、普通は慣れるもんじゃないけどね、と苦笑を浮かべながら、オルフェウスはあなたの肩を優しく叩いた。

結局、あなた達はキャスターと協力関係を結ぶこととなった。カルデア側はこの特異点の調査、可能であればその原因の排除を。そしてキャスターはこの歪んだ聖杯戦争を終わらせるという点で、双方の利害が一致した為だ。

あなたはキャスターと仮契約を結び、再び探索を開始する。

向かう場所は、キャスターからの情報で分かっている。この街にある柳洞寺という寺のある山の、その地下に広がる大空洞。その奥に、セイバーが待ち受けていると。

だが、その道中でマッシュが何やら思い詰めているのに気づき、少しばかり寄り道をする事になった。

「その……宝具が、まだ使えなくて……」

彼女の悩み、それはデミ・サーヴァントになってからそれなりに試運転はこなしたにも関わらず、肝心の宝具が使えない、それどころか使い方すら分からない事にあつた。

「今の自分では役に立てない」。言葉にはせずとも、彼女の弱気な姿が、そう語っている。

『でも、一朝一夕でいく話じゃないと思うよ？ だって宝具だし』  
そんなマシユを通信越しに見たロマンが、なんとか彼女を慰めようとするも――

「あ？ んなもんすぐ使えるに決まってるじゃねえか」  
あっさりとかヤスターがそれを否定する。

曰く、「英霊と宝具は同じものであり、マシユがサーヴァントとして戦えるのなら、既にその時点で宝具は使える」、らしい。

ロマンの言とかヤスターの言のどちらを信用すべきか悩むが、今回は多分、ヤスターの方が正しいのだろう。当の英霊本人なのだから。

そして、そんな彼女の問題を解決するには――

「な――!?!」

「ちよ、ちよつと！ アンタ一体何してんのよ!?!」

――オル、フェウス？

唐突だった。何か金属音のようなものが聞こえたかと思い、そちらを向いてみれば――オルフェウスが無表情のまま、あなたに向かって拳銃を突き付けていた。

――拳銃……拳銃!?!

そういえばステータス欄にそのようなものがあつたような、なかったような。しかし、今のあなたはそれどころではない。

よく見てみれば、拳銃を握っている手の人差し指が、しつかり引き金に掛かっているではないか。

「お、オルフェウスさん！ 一体何を――」

「何って……銃を彼に向けてる?」

「いえ、行動そのものについて訊いているのではなく!」

突拍子も無過ぎる行動に、あなた達は困惑する他ない。ただ一人を除き。

「――マシユ。君に今一つ足りないものが何か、わかるかい?」

「足りない、もの?」

「俺がこの引き金を引けば、彼は死ぬかもしれない。そんな状況の時、君がすべき事は？」

「それは……」

マシユは、言葉に詰まる。それは困惑がまだ続いているからであり、同時に別の要因——宝具を出せない原因と繋がっているからだ。

それを見たオルフェウスは、一つため息をつくとき、マシユから視線を外す。そして、引き金に掛かった人差し指をそのままにグリップから手を放し、拳銃をぶらんぶらんと振り子のように扱う。

「……ま、俺は撃たないし、そもそも撃てない。そんな事する気は、さらさらない」

「だろうな。お前さん、そのジュウとかいうのを向けてた時、殺気をこれっぽっちも籠めちやいなかったし」

どうも訳知り顔なキャスターの一言に、あなたは思わず「殺気の有無なんて分かるか!」と怒鳴ってやりたくなるが、そういう事を言い出せる雰囲気ではない。

「でも——そっちは違うだろ?」

——へ?

あなたがそんな間抜けな声を出すと同時に、「危ない!」と、マシユがこちらに素早く駆け寄ってきた。

瞬間、マシユの盾の表面で炎が弾け、その余波の熱があなたのむき出しの皮膚を襲った。

——あつツ!?

「キャスターさん! 貴方まで一体何を!」

「いや何、こいつは主思いだかなんだか知らんがやるつもりはねえつてんだ。だから——最初から考えてた通り、俺が一肌脱いでやろうと思つてよ。ま、安心しな。借りた槍は使わねえから」

いきなり何を言い出すんだと、槍を使わないというのはひよつとして手加減してやるつもりなのかとあなたはキャスターを見やるが、残念ながらその顔は素面だった。つまり、本気と書いてマジの殺る気で、今の攻撃を放つたのだ。

「さらさらさらあー!」

「うツ……きや、キャスター、さん！ 話を——」

立て続けに放たれる炎を、マシユは必死になって防ぐ。

だが、キャスターの側にはやめるつもりがないように見える。

それから、どれだけ防いだらうか。マシユは肩で息をしているのを見て、そこであなたも、自分の息が荒くなっている事に気づいた。

体表を流れる汗は、キャスターの炎の熱だけで流れたものではない。マシユと一緒に、命懸けで戦っている事への緊張感が、心臓の高鳴りと共に自然と火照っていくあなたの肉体を冷やそうと促しているのだ。

その緊張感が、あなたが今置かれているのは、命のやり取りの現場なのだという事を、改めて突き付けてきている。

「——はあツ、はあ、キャスターさん——その、こういった根性論では、なく——理屈にそつた教授、を——」

一旦猛攻が収まったと同時に、マシユはキャスターに対し、交渉を試みる。

だが、それに対するキャスターはと言えば、全てにおいて正反対で。

「——分かってねえなあ、こりや見込み違いか？」

カン、と、木製の杖で地面を一突き。その顔には、明らかな呆れの色が見えている。

「いいか、お嬢ちゃん。普通英霊なら誰でも使える宝具が使えねえつてのは、つまり魔力が詰まってるってことなんだよ」

それを解消するには、理性があつては邪魔になると、キャスターは語る。

「お前さんに必要なのは、一旦精根を使い果たして、そして英霊としての本能を引き出し、詰まった魔力を解放する事だ。そら、しっかり構えな、お嬢ちゃん。でなきや——お前も、お前のマスターも、ここで死ぬことになるんだぜ？」

口だけではない。目がそう言っている。「本気で殺す」と。

膨れ上がるキャスターの殺気を前に、あなたはキャスターの本気度合いを察する。

そこまで感じ取ったあなたは、ふと、あなたのもう一人のサーヴァ



ントにして、キャスターに先駆けて問題行動を起こした張本人のオルフェウスが何も言っていないのに気づく。

彼を探すようにあなたが見渡すと――

「ちよつと放しなさいよ！ あいつに一言文句を……いえ、それだけじゃ足りないわ！ 魔力を溜めに溜めたガンドを百発ブチ込まないと気が済まないわ!!!」

「よりにもよってキャスターのサーヴァントにそんなの通じないに決まってるでしょ。はい、どうどう」

「わたしや馬かあ！」

……何故か怒り狂った所長と漫才をやっていた。いや本当に何をしているのか。折角の（？）緊張感が台無しである。

とりあえず、あなたはそれを見なかつたことにしてキャスターと向き合うと、当のキャスターは杖を正面に構え、詠唱していた。

そこに、ロマンからの通信が入る。

『まずい！ 恐らくキャスターの宝具が来るぞ！ なんとか回避を――』

そうこう言っている内に、キャスターの目の前に炎が集まり、やがて炎の中に巨大な人影を創り出した。

そして、地響きを高らかに、立ち昇る炎を掻き分けるようにして、それは現れた。

「――灼き尽くせ！ 『灼き尽くす炎の檻』！」

――ウィツカーマン。ドルイド信仰における人身供物の祭儀を由来とする、細木の枝が組み合わさつてできた巨人。その胸部にある檻には、本来納められる筈の生贄はおらず。

炎を纏いながら一歩、また一歩と歩いてくるその姿は、さながら生贄を求めて荒れ狂う炎の巨人。

(どうすれば……)

意図せずして、あなたとマシユの思考が一致する。

あなたは、自分を守ってくれているマシユの背を見、そして左手の甲に刻まれた赤い痣を見やる。

それこそは令呪と呼ばれる、英霊をこの世界に繋ぎ止める楔。

所長曰く、本家本元の聖杯戦争で使われていた令呪とは違い、サーヴァントに対して絶対と言える程の強制力は無い。だが、それ自体が魔力リソースの結晶であり、その使い道は様々だ。

例えば、サーヴァントに宝具の解放を促す事も出来るし、指定の場所に瞬間移動させたりする事も可能だという。

(これを使えば、もしかしたら……)

「それは駄目だ、マスター」

令呪を使おうと考えた瞬間、まるであなたの考えを読み取ったかのように、オルフェウスの声がそれに待ったをかけた。

「これは、彼女がサーヴァントとして、自分の力で乗り越えるべき問題だ。君が令呪で助けても、彼女にとっては何の助けにもならない。それは一時しのぎにしかない、ただの自己満足でしかないんだ」

——……でも、このままじゃ。

「……いえ、やります。やらせて、下さい！」

あなたの不安を感じ取ったのか否か、マシユが声を張り上げる。まるで、自らを鼓舞するように。

オルフェウスは、そんな彼女をまっすぐ見つめる。今までの仲間に向ける穏やかな色の無い、ただただ強い意志の籠った視線が、マシユに突き刺さる。

……彼女は、必死になって自分を守ろうとしてくれている。声も足も震わせ、怯えているのが手に取るように分かってしまうというのに。その背中には、とても頼りがいがあるとは言いがたい。恐らく、今のままではあの巨人の攻撃を受けて、まともに立っていらなくなってしまうと、誰から見ても分かってしまうぐらいに。

……そう、幾ら人間以上の身体能力を手に入れ、鎧に身を包み、身の丈もある盾を構えていても、彼女の本質は英雄でもなんでも無い、ただの女の子なのだ。

そんな彼女に守られている事への僅かなコンプレックスと、何より情けなさが、あなたの中にあつた。

——……今の自分には、本当の意味で彼女を助ける事はできないのか。

「——何も、助ける為には絶対に令呪じゃないといけないうて訳じゃない」

——え？

「君には、令呪以外に何がある？」

そこまで言われて、あなたの脳内で一つの光が灯った。

——それは……。

それは、つい最近の出来事。ほんの数時間前の出来事だ。

あなたがカルデアの廊下で目覚めて、それから起きた数々の出来事。

目が覚めて、マシユと出会って、レフ教授と出会って。

それから管制室に行って、まだシミュレーションでの眠気が取れなくて、所長にこっぴどく怒られて、追い出されて。

それから、自分の部屋でサボっていたロマンと出会って、あの爆発が起きて、そして——

——……あの………せん、ぱい。手を、握ってもらって、いいですか？

……そうだ。あの時、自分に出来たのは、彼女を励ます事だけ。事実、それしか出来なかった。彼女を押しつぶしていた瓦礫を除ける事も、ロマンの言う通り逃げ出す事も出来ずに。

けれど、そこまで弱気な考えが浮かんで、あなたは思い出す。

今の彼女もそうだ。自分と同じように、役に立てない、何もできないと考えてしまっている。自分よりも色んな事が出来る彼女が。

「——何をすべきか、分かったかい？」

——これが正しいかは、分からないけど。

あなたは、頭の中にあるごちゃごちゃとしたものを振り払い——そして、自分なりの答えに至った。

……そうだ。それこそが。

——マシユ。

あなたは、盾をぎゅっと握りしめるマシユの手にそっと触れ、優しく、力強く声を掛ける。

「っ、せん、ぱいっ！」

——頭で考えるんじゃない。自分の心に従うんだ。

「自分の、心……」

——多分、君にとっての答えは、そこにある。

根拠なんて、あるわけない。彼女が、あなたの言葉を信じてくれる保証もない。だから、「信じている」なんて、そんな重い言葉は言えない。

だが……頭で考えてもどうしようもないなら。本能こそが大事だ  
というのなら。

一抹の不安を抱えていたあなただったが、しかし、マシユはあなたの  
の想いに応えた。

「——見ていてください、マスター」

あなたの想いを背に、マシユは、なけなしの勇気を奮い立たせる。

そして、ウィツカーマンの巨大な拳が、無慈悲にもあなた達二人に  
向かって振り下ろされ——

## 特異点F【3】

「……ついに、来ましたね」

——ああ。

キャスターとの猛特訓の後、あなた達は彼のガイドを受け、例の大聖杯なるものが存在する大空洞へとやってきた。

キャスターの情報によれば、現在シャドウサーヴァントで残っているのはアーチャーとバーサーカー。その内バーサーカーは、どうやらこちらが何もしてこなければ静かなままらしく、こちらは放置しても無問題。

アーチャーに関しては、本人たつての希望により、キャスターが一人で相手をする事になった。

白髪に褐色の肌をした、不思議な雰囲気のあるサーヴァントだったと、あなたは記憶している。

なお、キャスターが引き受けると言った際、オルフェウスが「それつてよく漫画である『ここは俺に任せて先へ行け！』つてやつじゃないの？ 大丈夫？」などと言いだして、一同を沈黙させたのはここだけの話。

「この奥に、例のセイバーがいるのね」

そして、アーチャーをキャスターに任せた一行は、その途中で最後の休息を取り終えたところだった。

「……さて、どうするマスター？ ここから先に行けば後戻りは出来ない。心だけじゃない、色々と準備するなら今の内だよ」

オルフェウスが、あなたの顔を見やるが、あなたの決意は変わらない。それに丁度、所長が隠し持っていたドライフルーツのおかげで、今のあなたは頭に糖分が回ってそれなりに冴えている……ような気がする。

——行こう。勝って、キャスターを驚かせてやろう。

「……うん。無茶は禁物だけど、その意気だ」

「頑張りましょう、先輩」

そう声を掛けられ、何故かあなたには、彼らが単なるサーヴァント

というよりも、どちらかと言えば頼れる先輩と後輩のような、そんな風に思えてしまっていた。

「……これが、大聖杯」

「何よこれ……超抜級の魔術炉心じゃない……なんで極東の島国にこんなものがあるのよ……」

大空洞の奥へ奥へと入っていくと、急に開けた空間に出た。

その最奥に、禍々しい気配と光を放つ何かが見える。

魔術に詳しくないあなたにも、それがまずいものだという事は、雰囲気で見分かる。

そして、所長曰く大聖杯を背に、黒い人影が堂々とした立ち姿で待ち構えていた。

——あそこにいるのが、

「はい。恐らく、キャスターさんの言っていた……」

漆黒の騎士甲冑に、とても聖剣とは呼び難い、禍々しい赤いラインの走る漆黒の剣。

どこか色が落ちていっているようにも思える白い肌と金髪に、顔のほとんどを覆う黒いマスク。

星の聖剣、エクスカリバーの担い手。遙か彼方ブリテン<sup>イギリス</sup>の地から、遠い日本にもその名を轟かせる伝説の騎士王、アーサー・ペンドラゴン。

「……俺は魔術には疎いけど、これだけは分かる。強いよ、彼女」

それは、あなたにも分かっている。何故か見た限りでは女性のように見えるが……恐らく、見た目などアテにならないに違いない。

現にキャスターも、「分かりやすく言えばロケットの擬人化みてえなものだ」と言っていた。

なんで昔の人間の筈のキャスターがロケットなんて知ってるのかと思っただが、英霊がサーヴァントとして召喚されると、聖杯から基本的な現代知識が与えられる仕組みになっているのだそう。なんとも便利なものである。

——それでも、立ち向かわないと。

「その通りだ。……と言つても、あつちはもう気づいてるみたいだけどね」

オルフェウスが、静かにショートソードを抜き放つ。

彼に合わせるように、マシユも呼吸を整え、あなたを庇うように盾を構えた。

「——ほう。面白いサーヴァントがいるな。それも二騎」

それと同時に、こちらを確認した——あるいは既に見ていた——らしいセイバーが、地面に突き立てていた漆黒の剣を抜く。聖なる剣と言うにはいささか禍々し過ぎるが、あれこそが世に名高いエクスカリバーなのだろう。

そして、彼女が魔力で編まれていたバイザーを解除すると、黒い魔力を体中から放出させながら、バイザーに隠されていた金色の瞳であな達を冷たく睨みつける。

その威圧感たるや、一般人のあなたはおろか、魔術師である所長も冷や汗を垂らし、マシユが息を呑むほど。唯一、オルフェウスだけはそれに動じず、だが決して油断する素振りすら見せず、この強敵を警戒していた。

彼らの反応を一通り見たセイバーは、今度はまるで物色するように目を細め——マシユに、彼女の持つ大きな盾に視線を突き刺した。

その視線に気づいたマシユは、一瞬体を強張らせるが、なんとか持ち直す。

「……ふむ。ならまらずは、その娘からだ。その宝具は、面白い」

ニヤリ、とセイバーが口元を歪ませる。その笑みは、おおよそイメージにあるようなアーサー王のする笑みではない。

あなたは、その笑顔にぞくりとした悪寒を感じた。

……来る！ と、そう確信させられるぐらいに。

「構えるがいい、名も知れぬ娘。その守りが真実かどうか、この剣で確かめてやろう！」

「ッ、来るわ！」

——マシユ、やるぞ！

「はい！ マスター！」

マシユの盾を握る力が強くなる。

対するセイバーは、慣れた手つきで軽く握り、漆黒の聖剣を後ろへ構える。

その瞬間、彼女が放出していた魔力が、更に爆発的に広がる。

『なあ!? 魔力反応更に増大!? い、一体どれだけの爆発力があるっていうんだ!?!』

画面の向こうで、ロマンが慌てふためく。だが、現場にいるあなた達に、そんな風に慌てる暇などない。出来ることは、覚悟する事だけ。

「卑王鉄槌、極光は反転する——光を呑め！」

彼女が一言、また一言と詠唱をする度に、エクスカリバーに黒い光が収束していく。

そして、光の収束が一旦収まったかと思った次の瞬間——

「——約束された勝利の剣!!」

エクスカリバー・モルガアーン

セイバーの雄叫びの如き声と共に、エクスカリバーに集約されていた魔力が放出。レーザーなんて可愛いものじゃない。シルエツトこそ普通の剣と同じぐらいのサイズだというのに、そこから放出されるのは、どこぞのロボットアニメで見えるような、大出力の極太ビーム。

さながら黒い光の奔流とでも呼ぶべきエネルギーの塊が、あなた達に向かって真つすぐ飛んでくる。

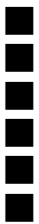
このままでは、直撃は免れない。その威力は、恐らくキャスターの宝具の比ではないだろう。

だから——マシユは退かない。ここで逃げ出せば、自分の後ろにいる仲間達が……何より、先輩が死んでしまうから。

マシユは、漆黒の光を前にして、一呼吸入れる。覚悟は、決まった。

「——宝具、展開しますー！」

そして、マシユはおもむろに盾を地面へと突き立て——





「——で、出ました。出ましたよ！ マスター！」

——ああ。おめでとう、マシユ。

「ったく、やりやあ出来んじゃねえか」

「はいっ！ キャスターさん、ありがとうございます！」

「いいって事よ。それより——」

「え？ あの——ひゃあ!？」

「——感謝なら、これで十分ってな！」

「あ、アナタってサーヴァントは！」

——このスケベサーヴァント！

「んだよ、宝具一発分魔力使ったんだから、これぐらい許してくれたって構わねえだろ？ なあ、前髪の兄ちゃん」

「……どうでもいい」

「——オホン！ とにかく、これでマシユも宝具を使えるようになったわね！ けど、真名が無いんじゃ不便でしょ。いい呪文スベルを考えてあげる」

「宝具の疑似展開なんだから……そうね、アナタにとつても意味のあるカルデアから取って——」



力強く思い切り地面に突き立てられた盾を中心に、黒い光を迎え撃つかのように青い光が広がる。光は巨大な魔法陣を描き出し、その左右に朧気ながら城壁の如き壁を形成する。

それこそは、彼女の「守りたい」という一途な思いから生まれた守護障壁。

「——ロド仮想宝具 / カ疑似展開 / デア人理の礎！」

彼女の思いから具現化した守りの壁に、騎士王の放った一撃が衝突する。

不浄の黒と、清浄の青。それら二つがぶつかり合い、拮抗する。黒い濁流の勢いは凄まじく、マシユも押し流されてしまいそうになる。

「う——あああああ!!!」

だが、彼女は諦めない。膝を着くわけにはいかない。屈するわけにはいかない。マスター先輩に胸を張って誇れるようなサーヴァントである為にも。

やがて、魔力の奔流が途絶え——そこには、二本の足で立つマシユの姿があつた。既に満身創痍でありながらも、彼女は気力と思いだけで、ただでさえ強大な力を持つセイバーの宝具を受け止め切つただ。

あなたは、此処に来る前にキャスターから聞いた助言を思い出す。

『いいか。お嬢ちゃんの宝具は、奴さんの宝具との相性は抜群だ。だが、いくら宝具の相性が良くて、お嬢ちゃんがそれなりに戦えるようにはなっても、その技量は奴には及ばねえ。宝具を使えば、奴からの一撃は防いでも恐らくはかなり消耗しちまうだろうよ。そこを、残つたお前さんらでなんとかサポートしなくちゃならねえ』

……ならば、次の手は——

「……ほう」

一方、宝具を放つたセイバーは、あれだけの攻撃を放ちながらもなお、余裕綽々といった様子であつた。

恐らく、今の彼女なら今と同等の威力の宝具を何発も放てるに違いない。

「今のを耐え——」

「はアッ!」

だが、自らの宝具を防ぎ切つたマシユに感心したような口ぶりの彼女に、無粋にも不意打ち気味に刃を突き立てんとする者がいた。オルフェウスだ。

だがその一突きは、彼が正面から攻めた事もあつてか、あと数十cmのところで防がれた。

「——ッ! 小癩な!」

突然の攻撃に、セイバーは眉を顰める。

見るからに反転<sup>オルタ化</sup>している彼女でも、まだ騎士道精神に僅かにでもこだわる部分があったのか、それともマシユを誉めてやろうと思った矢先に攻撃されて苛立ったのか、そこまでは定かではない。

「つと、流石に防がれるか」

「ふん。今の正面からの一撃を不意打ちとでも言うつもりか？ 貴様、剣は持っているが、恐らくセイバーではあるまい。なるほど、その立ち回りはアサシン擬きか、それとも道化師か？」

（流石は騎士王、か）

オルフェウスは余裕そうな態度を見せながらも、心の内で舌を巻く。伊達に一国の王をやっていた訳ではないらしい。優れた実力者揃いの円卓の騎士を統べるだけあって、観察眼もあるようだ。

……もつとも、最後はその円卓の崩壊によつて、ブリテンは終わったのだが。

余談だが、円卓にも一人、彼女に気に入られていた宮仕えの道化師がおり、各々が優れているが故に、常に危うかった円卓の騎士達を、彼が自ら笑いを取って繋ぎ止めていたという説もあるとかないとか。

「……さあ。道化師は、ちよつと近いかもね。けど、俺のクラスを当てるのは、一筋縄じゃいかない」

中らずと雖も遠からず。実際の大アルカナにおいても愚者と同一視される存在である道化師は、同時にオルフェウスの知る限り、愚者と同じく始まりの0を冠するアルカナであり、同時に愚者の逆位置とも言うべき性質のものだ。だが、果たして彼女はそもそもタロットを知っているのだろうか、と疑問を抱く。

しかし、世間にはアーサー王のタロットなるものがあるのを思い出し、案外知ってるんじゃないかと考え、挑発を兼ねた笑みを浮かべた。

そして、オルフェウスは右手に構えた剣を左手で逆手に持つと、左腰辺りからあるものを抜き放つ。

「それは……拳銃か。見覚えがあるぞ。それで私を撃つか？」

抜かれたのは、ステンレスシルバーのフレームを持った拳銃。そう、マシユの特訓が始まる直前に、彼が突き付けたあの銃だ。

「いいや。討つって意味なら正しいけど——こいつで撃つのは、俺だ」  
そう言うなり、オルフェウスはその銃口をセイバーに——ではなく、己の蟀谷に当てる。

「ちよつ、アイツ一体何してるの!? アナタ! さっさと止めなさい!」

「お、オルフェウスさん!? まさか自害を——」

これには、流石に味方である所長とマシユも慌てふためく。

あなたも同様に慌て、所長に促されるままに止めようとして——そこで思い直す。

『……ま、俺は撃たないし、そもそも撃てない』

あの時に言っていた言葉。そこに込められた意味とは何か。

それを思索していると、オルフェウスが持つ拳銃のグリップに淡く輝く蒼い光が、あなたの目に入った。

その光を目にした瞬間、あなたはオルフェウスのステータスを閲覧した時に見た、あるスキルの存在を思い出す。

(自害? ……いや、恐らくは別の何か——スキルか宝具の発動の為の予備動作か!)

同時に、セイバーもまたオルフェウスの秘めた何かに勘付いていた。彼女の高ランクの直感が、彼女に警鐘を鳴らしているのだ。

すぐさま、彼女はエクスカリバーを構え、魔力放出でブーストしながら跳躍。

「——へ」

一文字、紡がれる。セイバーとの距離は、まだ遠い。だが、彼女の魔力放出ならすぐに届くだろう。

「——ル」

一文字、紡がれる。これで、距離は半分。……しかし、彼は慌てない。

「——ソ」

一文字、紡がれる。既に、目と鼻の先にセイバーがいる。美しい顔だと、他人事のように思ってしまう。揺れる金髪に、いつかの彼女を思い出す。

「——ナ」

そして、最後の一文字が紡がれ——硝子の割れるような音と共に、セイバーの体が吹っ飛んだ。

「きやつ」

耳に何やら所長の可愛らしい悲鳴が届くが、そんなものがどうでもよくなるぐらい、あなたは目の前の光景に目を奪われていた。

オルフェウスが自らの蟀谷を撃ち抜いた瞬間、反対側の蟀谷から脳漿の代わりに光の欠片が弾け飛び、その欠片が彼の周囲を舞う。

それと同時に、オルフェウスの足下から青い炎が吹き上がり、欠片と一緒に渦を巻く。

(……笑ってる?)

何故だろうか。今のあなたからは、オルフェウスの決して遅しくはないものの、しかし頼り甲斐を感じさせる背中しか見えないのに。何故かその表情が、手に取るように分かる。不思議な感覚だ。

これは、そう——心で繋がっているような。

『——我は汝、汝は我』

不意に聞こえた声に、あなたは頭の中がちりつくような感覚に襲われる。

『我は汝の心の海よりいでし者』

その声と共に、それは徐々に姿を現していく。少年の内より出た欠片が集まり、形を成していく。

一見してそれは人型のようなではあるが、肌は勿論のこと、上腕二頭筋や太ももには肉が無く、代わりに金属で繋がれており、明らかに人間ではない。

『——幽玄の奏者、オルフェウスなり』

白と水色の、背中に大きな豎琴を背負ったその異形は、動かない口で自らをそう名乗った。

「オル、フェウス？」

「で、では、あの方は一体……」

突然現れた異形への困惑。それに支配されている二人を他所に、あなたは——彼を僅かに理解したような、そんな気分になった。

元より、彼は偽名としてオルフェウスの名を名乗っていた。その本当の由来がどこにあるかは定かではないが、恐らくあれが関係しているのだろうと、そう察する事は出来た。

そして、彼のスキルにあつた『心象具現・疑似降魔』。それが、今しがた彼が召喚した存在なのだろう。

「召喚術の類か？ まあいい。叩き伏せるのみ」

そして、突如として現出した謎の異形を前にしても、セイバーは全く怯まない。寧ろ、冷静に状況を把握しようとしているようでもある。

しかし、そんな彼女の観察眼をもってしても、目の前の存在がほとんど理解できないでいた。スキルによって出現したものというのわかる。だが、目に映る情報だけで分かったのはそれだけ。

「オルフェウス」

『アギ』

だから、突然異形が竖琴を手に取り、それを弾くと同時に炎がセイバーのいる場所で吹き上がった。対処のしようがなかった。

「なッ——」

それはまさに自然発火。自身の体を包み込む炎に、セイバーはほんの一瞬だけ驚く。

だが、すぐさまその炎を振り払うと、後ろに飛んで距離を取る。

そこへ、異形が立て続けに竖琴を弾き、彼女の着地点を次々と燃やす。

だが、セイバーも負けてはいない。まるで未来予知でもしたかのよう、炎を次々と避けていく。

——そして気づく。攻撃の射程範囲に。そしてその意図に。

「……最初は驚かされたが、なるほど。貴様も中々、面白い。だが、少々迂闊なのではないか？ わざわざ攻撃を打ち止めにするなど」

「……そっちこそ、どういうつもりか分かつてる癖に」

獐猛さを一切隠す事の無い笑みを浮かべるセイバーに、アルターエゴの少年も異形——ペルソナを引っ込め、不敵な笑みを浮かべて返す。

そんな少年の意図は、あなたにも伝わっていた。

「お待たせしました！ マシユ・キリエライト、戦線に復帰しますー！」  
そう、今までののは陽動だ。マシユの体力を戦闘可能な状態にまで持っていく為の。

マシユがアルターエゴの少年と並び立ち、あなたと所長もそれに合わせて少し前進する。

「さて、これで二対一。これぐらいのハンデは構わないだろ、騎士王？」

「構わんとも。未熟なサーヴァント一人……いや、二人程度」

「……やっぱ気づかれたか」

少年が自嘲気味に笑う。そして、背後にいるあなたの方へと視線を向けた。

「さあ。ここからが本番だ。俺が君の剣で、彼女は盾。そして君は、それらをどう扱うかを決める頭だ。ここからは、君が俺達に指示を出すんだ」

その言葉に、あなたは頷く。

……ここまでののは、所謂チュートリアルだ。今自分の元にいる二人のサーヴァントがそれぞれ何が出来るか、それを把握する為の時間。

オルフェウスも……否、アルターエゴの少年も、セイバーがただ者ではないからこそ、ペルソナという手札を切った。

あなたは、それらを知った上で、上手く彼らに指示を出さなければならぬ。

勝つか負けるかではない。生きるか、死ぬか。実際の戦いの果てにあるのは、その二つだけなのだから。

——……ああ。責任重大だね。

「大丈夫ですー！ マスターは、私が守りますー！」

「そういう事。気楽にやれ、とは流石に言わないけど、とにかく君が思うようにやればいい。俺達も出来る限りそれに応えるし、ピンチになれば手助けぐらい出来る」

二人のサーヴァントのやる気を受け、あなたは真つすぐ正面を見据える。

待ち受けるは強敵、セイバー。

勝てるかどうかではない。勝たなくては、死あるのみなのだ。

——行くぞ、二人とも。

「了解です、マスター！」

「さあ、行こうか」

そして、最初の特異点での、最後の決戦の幕が上がった。